

I はばたき学習 研究テーマ

自ら見いだした課題について、よりよい方法を用いて探究し、自分にとっての答えとしての概念をつくり出していく子どもを育む学び

II 研究の重点

探究する意味や価値、協働的に探究するよさを見いだしながら、新たな探究に向かっていくための支援の工夫

III 2年次の成果と課題

1 成果

(1) 自他の考えのずれを基にした、納得できる点と問題点の獲得

児童は、自分たちが設定した課題を解決するために、自分なりの解を導き出そうと考え、追究した成果を出店や映像作品などとして表現した。そして、表現したものを更によくするために、児童が企画した出店に対するレビューを書いたり、制作した映像作品に対する評価とコメントを残したりする場を設定した。自分たちがよしとしていた部分に低評価（問題点）が付いたり、無自覚だったよさ（納得できる点）を自覚できるようなコメントをもらったりすることで、自他の考え方や感じ方のずれに気付く場となった。自他のずれから自分たちの考えを見つめ直す必要感が生まれ、問題点を解決するために低評価をした人にその詳しい理由を聞きにいたり、低評価の理由を覆せるような解決策を考えたりして、現状を打破する追究をしながら現時点で形成している概念の更新につなげることができた。自分の根幹にあった、現状が課題解決の最適解であるという認識、つまり概念が揺さぶられ、現状では課題解決が十分ではないことを把握し、もっとよりよくしたいという意欲が生まれたのだと考えられる。

(2) 思考ツールによる追究したい観点の焦点化

前述した考えのずれへの気付きにより、そこから影響を受けた考えを明確化する姿が見られた。さらに、それらに共通している点を共有したことで、課題解決に働く観点についての気付きを得られた。その上でより追究したい観点を焦点化できるように、活用する思考ツールとして、3分割（他者／改善案／自分）のボックスや、レーダーチャートとウェビングマップを融合したツールを準備した。自他の考えにずれがあったものに絞って表の両端に書き込んだり、課題解決に必要な観点をレーダーチャートに新たに組み込んだりするなどして、追究する観点を焦点化していく姿が見られた。そしてこのことが、折り合いを付けた新たな考えを表の間に書き込んだり、チャートの観点からウェビングをして関連するものを書きつないだりして、焦点化した観点に着目し、追究に向かう姿につながった。このことから、追究する観点を焦点化することが、更なる追究への見通しをもって活動することにつながると考えられる。

レビューから出た意見	「4学年祭」本番に向けて	自分たちの考え
例 出し物がむずかしすぎて、つまらなかった。 少しなすび 時間が長い	もっとかんたんにするために、ルールをかえよう！ 出しものを分けて、べつべつにならすも らう。 けい品をかえる。 2種類製作。 あなをもっと小さくする → 画用紙を 上からは	出し物がむずかしくて、クリアできる人がいなかった。 ※5 出し物の準備を 早く終わらせる
けい品をかえてほしい。(1等) ゴキウでほろをかわよくしてほしい。 中が見えた		

2 課題 必要感のある思考ツールの活用

追究が進むよう思考ツールを用いたが、必要感のある思考ツールの活用であったかは疑問が残った。2年次の実践では、ねらい達成に効果的と考えた教師側からツールを提案した形であり、児童が自ら求めて扱ったツールではなかった点が課題である。他教科等で扱ったツールを総合での学習に生かせるようにし、必要感をもって効果的なツールを選び活用する児童の姿を引き出していきたい。